

## 記念講演で話したこと・言い残したこと

松尾 宗次

2015年4月、寺田寅彦記念館友の会で「寺田寅彦の肩の上」と題して話をさせていただきました。その内容は、既に『榭』に掲載された拙文をもとにしたものであった。先ず48号の「ノーベル賞に値する寺田寅彦の研究」そして昨年2014年の世界結晶年に因んだ「寺田寅彦と「世界結晶年(IYCr2014)」」をもとに語り、一般には馴染み薄いX線結晶学が電磁鋼板や乗用車用鋼板の機能向上など実際の材料開発



に大いに役立ち現代の電化社会や車社会の基盤をなすことを述べた。このような重要で、ノーベル賞は逸したけれど、学士院恩賜賞に輝いた世界的な業績を挙げたのに、何故X線結晶学を僅か二年で中断してしまったのか謎である。寅彦の心の底には終生X線結晶学への愛着があったことは確かである。寺田の燈した学問は優れた門弟たちによって大きく発展したのではあるが、寺田寅彦の心の動き、とくに「井の口村事件」の影響について未だ知っておきたいと願っている。

もう一つの話は地球科学者としての寺田寅彦である。寺田は逸早く大陸移動説の重要さに着目した。同じく大陸移動説に注目した高知の人に山崎直方という学者がいたことも述べた。寅彦は「大陸塊の縁辺のちぎれの上に乗っかって前には深い海溝を控えている」と大陸移動説を踏まえ、日本列島の危うさを述べている。私の講演の直後には、ネパールで大地震が発生した。寺田は大陸移動説を解説した文章の中で「インドが北の方に縮まった。その時にできた皺がヒマラヤを造った」の生成について記している。世界の最高峰ヒマラヤの頂上付近では海の生物の化石が見つかっている。そのような巨大な動きをもたらす地球のダイナミクスを知り、原発立地の問題なども考えてみる必要を感じる。

寅彦は偶然について考え、カオスやフラクタル・複雑系など現代の課題に先鞭をつけた。この点については講演では触れるに至らなかった。友の会のホームページには「寺田寅彦生誕120年 生れるのが半世紀早かった」などの拙文が収載されている。ご関心があったら、お読みください。

